

研究分野	資源評価	部名	漁業開発部
研究課題名	沿岸魚類資源動向調査（底生魚類調査）		
予算区分	県単		
試験研究実施年度・研究期間	H.11 ～ H.18		
担当	鈴木 亮		
協力・分担関係	なし		

〈目的〉

本県沿岸における底魚資源（主にタラ類・カレイ類）の分布量・発生量を定期的、継続的にモニタリングし、併せて漁獲状況や資源の再生産についての基礎情報を収集することにより、資源量推定や資源変動メカニズム解明並びに資源の動向予察に役立てることを目的とする。

〈試験研究方法〉

日本海 9 調査点において 2003 年 1・2・3 月、日本海 12 調査点において 2003 年 4・5 月、津軽海峡 6 調査点において 2003 年 6・10 月、太平洋 13 調査点において 2003 年 6・10 月に青鵬丸によりオッター・トロールを使用して調査を行った。なお、得られた標本はできる限り、低位の分類群まで種を査定し測定を行った。また、操業中はオッター・ボード間隔、曳網水深、曳網速度等を魚網監視装置（RX-400）で計測し、調査点毎に CTD による海洋観測を行った。

〈結果の概要・要約〉

【日本海—マダラ】（図 1）

2002 年 1～3 月調査で 2001 年級群と思われる体長 90—100mm にモードをもつマダラ 1 歳魚が、推定現存尾数 417 万尾と多かったので、初期減耗を考えると 2001 年級群の発生量は多かったと思われます。2003 年 4～5 月調査では体長 40—60mm にモードをもつ 2003 年級群が、推定現存尾数 663 万尾と多かった。よって、2001 年級群、2003 年級群の発生量が多いことから、卓越年級群と思われるので今後の漁獲動向が注目される。日本海マダラ資源動向を把握する上で、4～5 月の十三沖、岩崎沖水深 100m は今後も注目していく必要がある。また、青森県日本海沿岸にも産卵場が形成されている可能性を示している。しかし、2003 年の調査では産卵場と考えられる十三沖水深 100m では、分布密度も低く完熟個体、放卵、放精個体は確認できなかった。

マダラ 0 歳魚も高い分布密度だった岩崎沖水深 100m において、ハタハタ 0 歳魚と考えられる体長 40 - 50mm にモードがある個体群が、53,767 尾/k m<sup>2</sup>とマダラ 0 歳魚の約 2 倍と多い値を示した。

【太平洋—マダラ・スケトウダラ・ババガレイ】（図 2）

マダラ 2003 年級群の推定現存尾数は、136 万尾と 407 万尾だった 2002 年級群を下回った。スケトウダラ 2003 年級群は、1,743 万尾と 33 万尾だった 2002 年級群より大きく上回った。2003 年の調査では、ババガレイ若齢魚の推定現存尾数は 868 千尾と年々増えてきているので、今後の漁獲動向が注目される。また、太平洋マダラ資源動向を把握する上では、塩釜沖、むつ小川原港沖は分布密度が高い事から注目していく必要がある。

【津軽海峡—マダラ】（図 3）

佐井沖での 2003 年級群の採集尾数が 26 尾と少なく 2002 年級群と同様の発生量と思われる。大畑沖では 32 尾と佐井沖より多く入網された。また、2001 年級群の発生量が他年と比べ約 7 倍と多く、2004 年は漁獲対象となる 3 歳魚として陸奥湾に産卵のため来遊してくる。近年陸奥湾のマダラ漁は不漁が続いているので、今年の漁獲動向が注目される。

〈主要成果の具体的なデータ〉

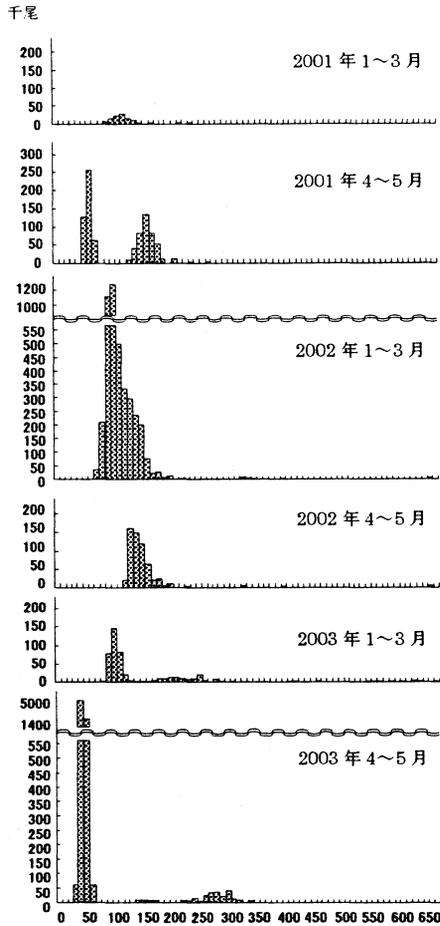


図1 面積-密度法により引延ばした  
日本海マダラ体長組成 (mm)

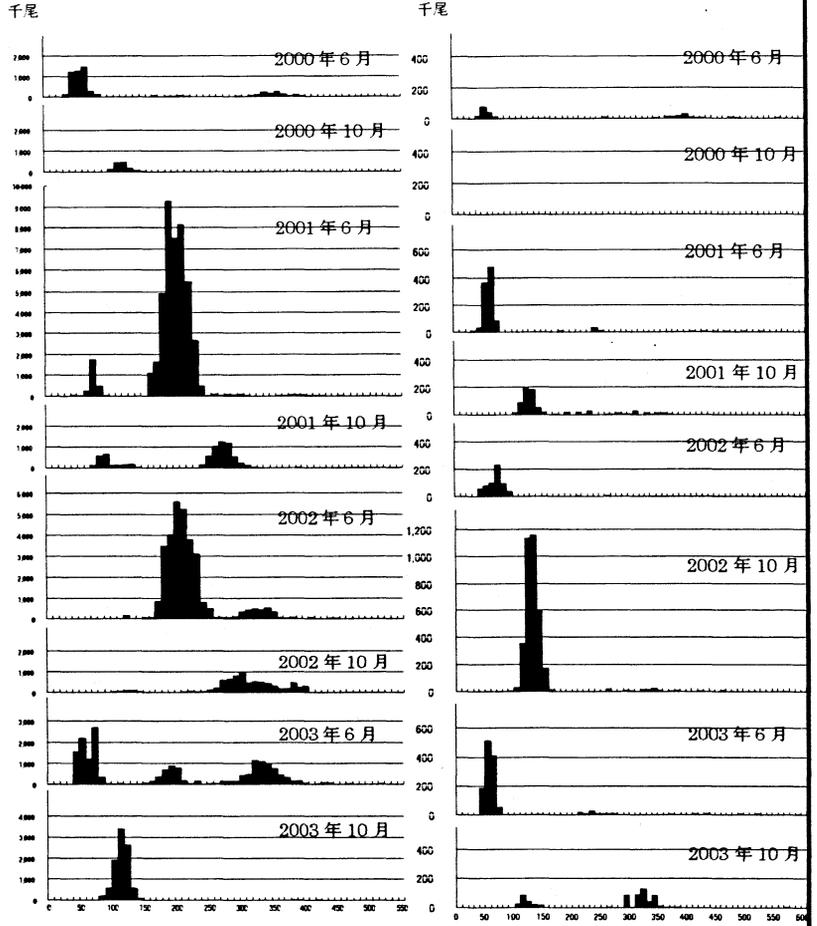


図2 面積-密度法により引延ばした太平洋マダラ・スケトウダラ体長組成 (mm)

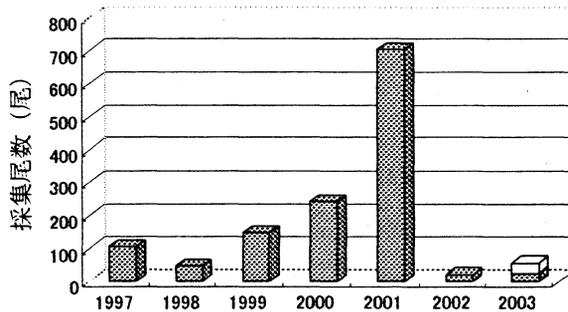


図3 佐井沖でのマダラ  
0歳魚採集尾数  
(白抜きは大畑沖での採集尾数)

〈今後の問題点〉

日本海ではマダラ産卵場の確認。太平洋ではスケトウダラ 1 歳魚以上は深みに移動するため、現在の調査点ではうまく捉えられていないが、水深 350m 以上はトロール調査ができなので何でカバーするか問題である。

〈次年度の具体的計画〉

日本海、津軽海峡、太平洋でのオッタートロール調査と新たに計量魚探調査を実施予定。

〈結果の発表・活用状況等〉

日本海のマダラについては、第 4 回北東北知事サミット (報告書予定)、第 4 回青函水産試験研究交流会議で発表。太平洋については、平成 15 年度底魚研究連絡会議 (東北底魚研究第 24 号掲載予定) で発表。